

## 東海地方西部の縄文前期後半～中期初頭の動態

増子 康 眞

### 1. 問題の提起

草創期から前期前半までに、地球規模の後氷期以降の温暖化という環境の変化によって、列島では環境適応に成功した縄文人口の順当な拡大が観察されている。しかし以降の縄文時代にあつては各地域に分布する遺跡数が時代により増減（≒人口の増減）する現象が認められる。その主因は気温と海面水準の高低に伴う植生や魚貝相の変化に起因し、遺跡数は変化への適応の成功度合いを示す結果であろう。

それとは別に、何らかの事情により遺跡が極端に減少してしまう事態が生じたことを、東海西部にあつて筆者は観察している。この局地的現象は前期初頭の木島式段階、前期末～中期初頭、後期前半の福田K II式段階と後半の宮滝式直前ないしその最初期に存在する。この現象は時間・地域の範囲が各ケースで微妙に異なり、精確な原因は不明である。

約6千年前の木島式段階は、直前の上ノ山Z式土器段階に名古屋市緑区上ノ山貝塚と鉾ノ木貝塚等伊勢湾沿岸で、極端に小形化したハイガイの貝層が出現し(増子 1976)、その直後に貝塚形成が中断する。木島式土器は東海西部には確実な1片の土器も認められず、美濃・飛騨の洞穴遺跡に数片が存在するのみであり、駿河を含む以東と以北には多くの遺跡が知られている。

後期前半の福田K II式段階も、その典型は揖斐郡以西・北陸まで普通に存在するが、愛知県や美濃中部以東に存在の痕跡もない。その直前の後期初頭である中津＝称名寺式土器は東海西部に、多くはないが普遍的に認められる。

宮滝式直前ないしその最初期は、稲武町中村遺跡で伊豆天城のKg火山灰の薄い層が分布し、典型的宮滝式土器のドングリピットが火山灰層を掘り抜いて構築され、火山灰降下の被害による影響の可能性がある(KKパレオ・ラボ 1999)。三重県南部・滋賀県には当該期遺跡が普通に存在する。

これに対して前期末以降中期初頭遺跡は約20箇所あるが、この数値は中期後半遺跡数の10%以下である。顕著な現象としては、貝塚が全く存在しないこと。また当地域の伝統的な土器型式要素がほぼ消滅して、東西の隣接地域の土器組成が変容せず波及し分布する。これは前記の類型とは異質な在り方である。この部分を少し具体的に観察し、東海西部の縄文時代について考えてみよう。

### 2. 遺跡と土器型式推移の個別様相

ここでは愛知県と岐阜県(旧美濃国)を対象として時期別に概観する。最初に筆者の考えによる時系列の編年推移を次ページに示したので参照いただきたい。

①. 前期後半：上記の領域に他地域の型式組成が波及した第一段階である。長良川流域、木曾川の八百津町より下流地域、足助町以南では地域伝統の大麦田III a式の主体的分布地域である。つまり東海西部の西半分の地域である。豊川流域を含む東三河も断片的資料によれば、大麦田III a式の分布圏と推定される。

これに対して、信州木曾に隣接する恵那郡と中津川市を含む恵南・恵北地域の上矢作町小御所遺跡2住、中津川市落合五郎4住は、関東・中部山地に分布する諸磯C式古段階の土器群からなる。伊那に隣接し根羽川と呼称を変える矢作川上流の境に、愛知県側から合流する支流の野入川の段丘に

立地する稲武町ヒロノ遺跡炉穴では、諸磯C式と大麦田III a式がほぼ折衷する緩衝地帯の様相を示している。その直後のヒロノ1住は大麦田III b式=諸磯C式新段階であるが、明らかに諸磯C式新が卓越する状況を示す。恵北地域の中津川市落合五郎2住には当然大麦田III b式は駆逐されている。大麦田III b式土器は木曾川に沿った坂祝町芦戸遺跡・長良川の岐阜市御望、揖斐川の藤橋村上原遺跡で主体をなす。この段階の土器は海岸付近に全く発見されておらず貝塚がない。東海西部の縄文時代を通して唯一例外的な在り方を呈している。

- ②. 前期終末： 土器編年は今村啓爾の十三菩提編年(今村 1974)に依拠するが、実際の在り方は長崎元廣の日向II・籠畑Iに直接対比が可能である(長崎 1997・98)。近畿の型式群との関係が強いが、編年が未整備でむしろ当地の在り方が変遷の実態に近い。しかしマザーランドは近畿にあるので名称は近畿に従う。つまり本州中部で研究の遅れている分野ということである。

前期終末I期は全地域に近畿の北白川下層III式土器が画的に主体となる。恵北地域の中津川市落合五郎1住、恵南の上矢作町小御所・久武瀬、揖斐郡上原が相当する。しかし、木曾川沿いの可児市北裏では大麦田III b式系統の北裏ZIV式が共伴する。長良川の岐阜市御望、揖斐川の藤橋村上原遺跡にもわずかに残存する。海岸地域の遺跡は前期後半に引き続き存在が確認できない。

前期終末II期は、長良川の岐阜市御望、恵北地域の中津川市阿曾田23住で大歳山式が主体となる。しかし知多半島の清水ノ上ではE層(混貝土層)に川崎市十三菩提遺跡の十三菩提式中頃に対比できる土器が出現し、他型式の波及ルートに海岸経由が加わる。沿岸での生活復活が確認された最初の例として貴重である。

前期終末III期は、美濃西部の九合洞穴では大歳山式がほぼ主体となり、恵北の中津川市の寺上住居址土器は前期終末II期あるいはIII期か判断が困難だが、大歳山式の深鉢を炉として用い、籠畑I式と半ばする組成を示す。同じ中津川の落合五郎3住に籠畑I式土器が主体となって存在するが、口縁内面に文様帯を設置し、あるいは口縁部のモチーフに近畿系の環状隆帯文を多用するなど土着変容がうかがえる。愛知県に当該期の明確な資料は見つかっていない。混沌の時代といえると思う。

- ③. 中期中頭： 依然として当地の独自の系列の土器は存在しない。長崎元廣の籠畑II式の細別と、今村啓爾の五領ヶ台I式の細別を素直に受け入れ、この段階を中期中頭と定義する。

その前半は大歳山式の単純化した近畿系土器と信州の籠畑II式古段階土器、および五領ヶ台I a式からなる。前期末に存在した恵北地域の遺跡は不鮮明になり、北設楽の一之橋遺跡はほぼ単純で五領ヶ台I a式を除く上記二つの系列がほぼ半々で組成する。東海西部には数遺跡で土器が検出されるが断片的である。特筆されるのは南知多沿岸の林ノ峰・山田平に存在することで、これらは長期継続遺跡としての性格を持つ。沿岸の環境適応に成功したことを示すが貝塚は形成しない。

前 期	型式の推移		代表的遺跡	
	(近畿)	(関東)		
期	大麦田III a	北白川下層IIc	諸磯c古	洞戸市場、足助ヤゲ西、稲武ヒロノ炉穴
	大麦田III b		諸磯c新	坂祝芦戸、稲武ヒロノ1住、
	前期終末I	北白川下層III	十三菩提古	可児北裏、藤橋上原、上矢作小御所
	前期終末II	大歳山	十三菩提中	岐阜御望2住、知多清水ノ上ZIV
	前期終末III		十三菩提新	中津川落合3住、武儀郡九合Z
中 期	一之橋		五領ヶ台I a	設楽一之橋、
	北屋敷I	鷹 島	五領ヶ台I b	渥美北屋敷、南知多山田平

東海西部の前期後半～中期中頭土器の推移

その後半は、北屋敷Ⅰ式土器と呼称される。渥美半島の先端近い内湾側の海蝕崖下の標高3m未満に立地する貝塚遺跡である。近畿の鷹島式土器と籠畑Ⅱ式新・五領ヶ台Ⅰb式からなる組成である。山田平では継続し、内陸でも前半に比べて遺跡数は増加し、美濃西部の九合では鷹島式主体が明らかである。山田平では籠畑Ⅱ式を主体と報告するが、隣接する林ノ峰K層の状況は鷹島式が優勢であり特定することはできない。

### 3. 縄文社会構造の基盤が土器型式分布領域圏にあったことの確認

遺跡の絶対数が減少し当地本来の土器型式系統が消失するのは、分布領域を基盤とする縄文時代の地域文化の崩壊を意味すると推定される。この事態を惹起した理由は何か。部族間の争いに敗れたため、疫病の流行、天災(噴火・地震・森林火災)などは一時的待避の理由になるが、前記の数百年におよぶ原因とは考え難い。

その原因として、藤森栄一は信州では縄文海進以降の寒冷化に伴う植物食料の獲得が困難となり、狩猟への依存が高くなったという仮説を述べたことがある。江坂輝弥は栗の栽培を提起し、青森・三内丸山で佐藤洋一郎は遺伝子配列によってその事実を確認したという。

東海西部でも同じ現象があったのであろうか。関東や信州では狩猟用の石鏃が前期末に増加し、陥穽(落とし穴)が著しく多くなる現象も藤森説に合致する。遺跡数の減少は関東・信州でも同じであるが、それにしても、なぜ東海西部が極端に住み難かったのか説明は困難である。

本質的な命題としての上記の解決の前に、本論は土器型式の在り方から具体的に解明できる可能性のある問題として、東海西部の沿岸・内陸平野・山地を含む約10,000km<sup>2</sup>の広大な地域において独自の土器系譜を保持できない状況が存在する事実を検討したい。この時期以降に、東海西部では地域独自の土器系譜を失うことはない。とりわけ矢作川下流の1,000km<sup>2</sup>に満たない面積を領域として、晩期中葉に桜井式土器が分布圏を形成する事実は対照的で、今判明しているのは内陸段丘上の豊田市野見と岡崎市真宮遺跡、沿岸で貝塚を形成する安城市桜井・西尾市寺津の計4遺跡がその領域形成遺跡であるが、海山の幸をしっかりとネット化し完結した経済基盤があれば、狭くとも拡大再生産を維持できることを物語る。おそらく列島内で最も狭域な型式形成領域文化圏と推定される。

これに対して東海西部全域という約10倍の広大な地域で、独自の型式領域圏を維持できなかった前期末の状況は如何に深刻な事態であるかわかっていただけだと思う。前期末の極限状況は海水準が一定しないため貝採集ができないという、縄文社会開始以来の悪条件が重なって生じたと推定している。

同様な過疎現象は地域と時期を違えて存在することを指摘できる。京都盆地と琵琶湖沿岸では中期後半の中頃(里木Ⅱ式直後から北白川Ⅲ式の間)に伝統的な船元・里木系統が消滅し、東海西部の中富後半型式・神明式と北陸の古府式土器が断片的に検出されることを指摘した(増子1988)。その期間は少なくとも3型式以上で100年を超える時間を想定される。共通する特徴は遺跡の数が極めて少ないことであり、継続する遺跡にあっても著しい小規模化が想定され年間を通しての定住が疑わしいことである。地域伝統土器型式系譜の存続が、過疎化現象によって阻まれていることをここでも検証できると思う。

### 4. 新しい方法論に向けて

東海西部の前期末～中期初頭の編年表に掲げた7型式の継続期間は、他地域の型式が定着せず単一型式内で終息する事態が継起していることである。我々はこの機会をどのように生かすべきかを考察しなければならない。具体的にはその始まりと終末の年代を押さえ、かつその間の各型式の継続時間を捉え

ることにより、一型式の継続期間の最短期間と最長期間を解明するデータを得られるはずである。

昨年12月1日縄文文化研究会では横浜市で「列島における縄文時代集落の諸様相」という研究集会を持ったが、その最大の難問は同時存在の住居の数であった。その基本として一型式の継続期間の掌握が行われていないことである。そのためには重複の可能性ある継続型集落での測定より、単純が保証された遺跡で信頼のおける数値が得られると思う。一型式で床面(住居廃絶時)と埋没土層が構成される場合や、住居の改築・建替が観察される例があり、一型式の継続期間が数十年以上であることを示唆する事例がある。こうしたデータの累積がいま喫緊に必要であることは明らかであると思う。

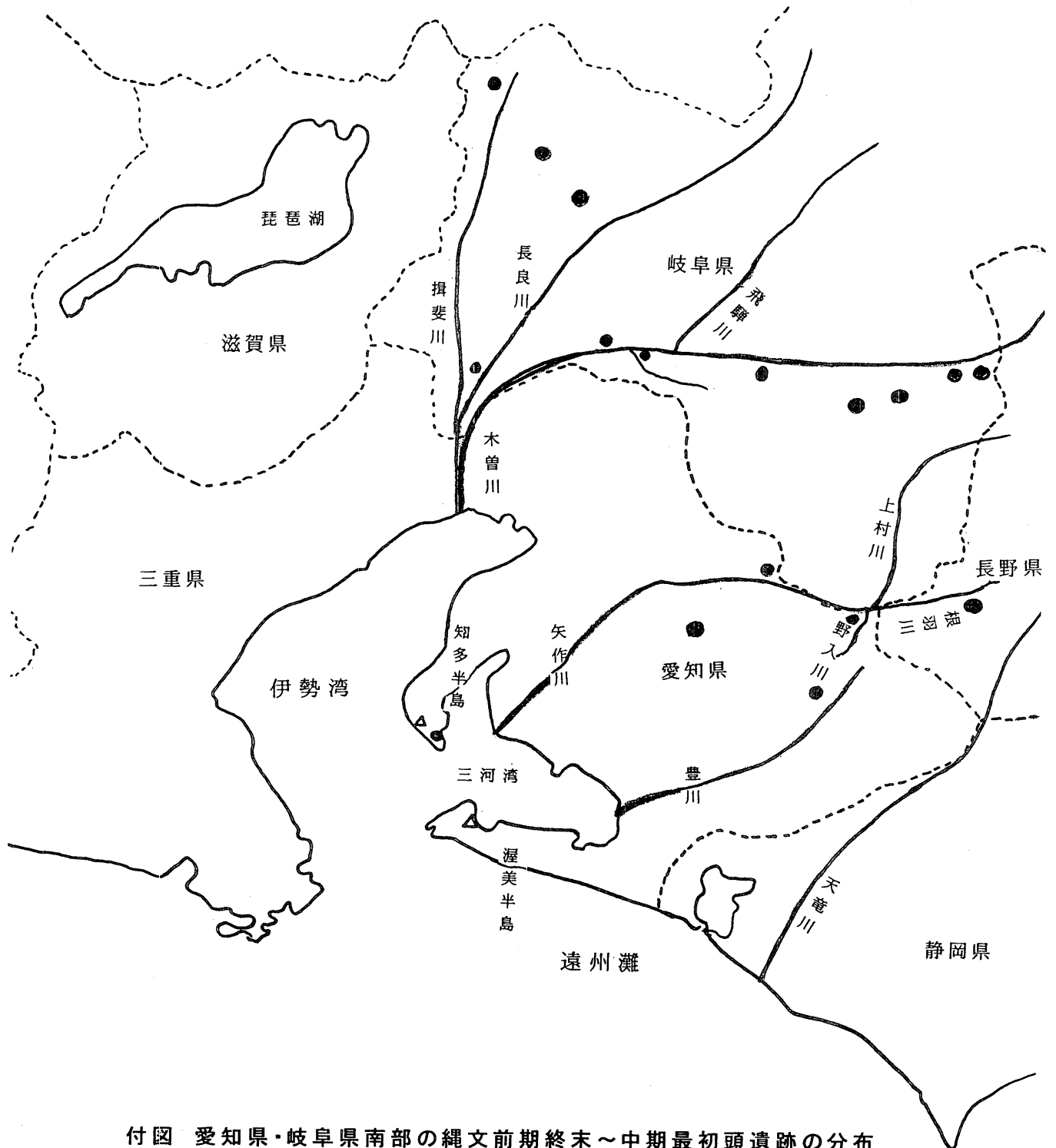
#### 謝 辞

今回の縄文前期末における過疎化が生じた最初期について、ヒロノ炉穴の諸磯C古段階がBP.5,590(木炭・較正)年であることを中村先生のご好意によって測定いただいたことを付記して感謝します。

(2001年12月30日了)

#### 参考文献

- 麻生 優他 1971『十三菩提遺跡・埋蔵文化財発掘調査報告2』神奈川県教育委員会
- 今村啓爾 1974『とけっぱら遺跡』登計原遺跡調査会
- 今村啓爾 1985「五領ヶ台式土器の編年」『東京大学考古学研究室紀要4号』
- 磯辺幸男・山下勝年 1976『清水ノ上貝塚』南知多町教育委員会
- 市原寿文 1978「寺上遺跡」『岐阜県中央道関係埋蔵文化財緊急調査報告書その2』建設省
- 内堀信雄 1995『御望遺跡』岐阜市教育委員会
- kk バレオ・ラボ 1999「中村遺跡 自然科学分析」『稲武町史 考古資料編』稲武町
- 高木宏和 1989『芦渡遺跡』坂祝町教育委員会
- 長崎元廣 1997・98「中部地方の縄文前期末・中期初頭期における土器型式論の系譜と展望」長野県考古学会誌83・85号
- 堀田一浩他 2000『上原遺跡II』岐阜県埋蔵文化財センター調査報告書第54集
- 増子康真 1976「名古屋市鳴海町鉾ノ木貝塚の研究」古代人32号 名古屋考古学会
- 増子康真 1988「近畿地方縄文中期後半土器編年の問題点」『求真能道』巽三郎先生古稀記念論集刊行会
- 増子康真 1995『稲武町大野瀬ヒロノ遺跡緊急調査報告書』稲武町教育委員会
- 増子康真 1996「縄文前期後半・大麦田式土器の再検討」古代人57号 名古屋考古学会
- 増子康真・夏目和之・坂野俊哉 1998『上村川下流域の考古学的調査』岐阜県恵那郡上矢作町教育委員会
- 増子康真・坂野俊哉 1999『ヒロノ遺跡第2次調査報告書』稲武町教育委員会
- 渡辺 誠編 1985『阿曾田遺跡発掘調査報告書』中津川市教育委員会
- 渡辺 誠編 1988『落合五郎遺跡発掘調査報告書』中津川市教育委員会



付図 愛知県・岐阜県南部の縄文前期終末～中期最初頭遺跡の分布  
(●=包含地 △=貝塚)